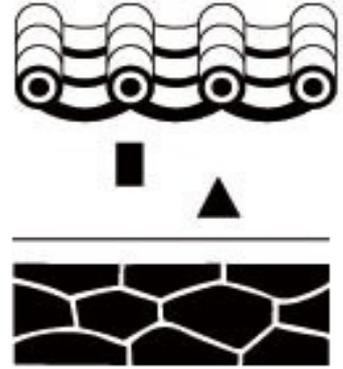


OGO 第81号

小田原ガイド協会だより

令和元年9月1日発行（秋号・季刊）

NPO 法人 小田原ガイド協会 〒250-0014 小田原市城内 3-22
TEL 0465-22-8800 FAX 0465-22-8814
ホームページ URL <http://www.odawara-gaido.com>



戦国都市 小田原研究のいま①

これまでの研究

佐々木健策

小田原北条氏（以下、北条氏）や都市としての小田原を対象とした研究は、北条氏に関する文書が多数残っていることもあって、古くは文献史学の立場からのアプローチが中心でした。市村高男氏が、「東国の戦国史研究は北条氏に代位される「一極集中」的傾向を生み出している」と表現したように「市村一九九四」、関東の戦国史研究は北条氏を中心に進められてきたと言っても過言ではありません。しかしその反動からか、一九六〇年代以降は小田原を正面から見据えた研究は停滞し、北条氏や都市として小田原を扱う研究も少なくなりま

す。ところが、八〇年代に入ると『戦国遺文 後北条氏編』の

刊行や『小田原市史』の編纂事業を受け、改めて小田原を対象とした研究が垣間見えるようになってきます。九〇年代になると、市村高男氏・永原慶二氏らは小田原の都市としての性格を示し、戦国城下町としての小田原の位置づけを明確にするなど「市村一九九四、永原一九九八」、改めて小田原の主体的な研究が進められるようになりました。

一方、考古学の立場からは、八〇年代に増加した発掘調査の成果を受けて、それぞれの調査地点における個々の報告書でその「場」の持つ空間構造についての検討が行われるようになり「諏訪間ほか一九九九・小林ほか二〇〇二」。これにより、文献史学を中心に進められてきた研究は、考古学的な成果の蓄積を経て、相互比較による検証を可能とする新たな局面を迎えることになったのです。

そして二〇〇〇年代以降、このような文献史学の研究成果と考古学的な新出成果の蓄積を受け、さまざまな視点で研

究を行う環境が整ってきました。近年では、史跡小田原城跡御用米曲輪の発掘調査により多大な成果が得られたことも大きく、越前一乗谷や豊後府内、周防山口・阿波勝瑞など、各地で守護大名・戦国大名の主要都市の発掘調査が進められたことも、北条氏や都市小田原を研究するための大きな成果を提供してくれました。

筆者は、このような近年の研究動向を受け、新たな戦国期小田原の都市像を提示してきました「佐々木二〇〇五・二〇〇八・二〇一〇など」。全国的な研究会等でも、長らく小田原が取り上げられる機会はありませんでしたが、近年ではその回数も増え、小田原を取り巻く研究動向は、新たな視点で総合的に検討を加える時期に来ていると言えます。《以下次号》

引用文献

市村高男 一九九四『戦国期東国の都市と権力』思文閣史学叢書

小林義典ほか 二〇〇二『小田原城三の丸藩校集成館跡第

Ⅲ・Ⅳ地点発掘調査報告書』小

田原市教育委員会

佐々木健策 二〇〇五「中世小

田原の町割と景観」『中世のみ

ちと橋」高志書院

佐々木健策 二〇〇八「相模府

中・小田原の構造―小田原城に

みる本拠地と大名権力」『中世

東国の世界3 戦国大名北条

氏」高志書院

佐々木健策 二〇一〇「城下町

の区画―相模国小田原を例に」

中世都市研究15『都市を区切

る』山川出版社

諏訪間順ほか 一九九九『小田

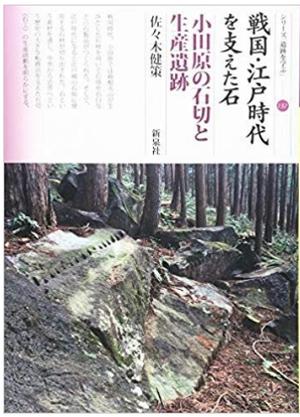
原城下中宿町遺跡第Ⅲ地点』

小田原市教育委員会

永原慶二 一九九八「戦国都市

小田原」『小田原市史』通史編

原始 古代 中世、小田原市



佐々木健策氏最新刊

◆企画ガイド◆

おかげ桜ひとめぼれの春

土井正代

夕べから降っている雨が早朝にもやまず、どうしたものかと思案、参加人員が減ることも覚悟していましたが、応募八十三人のうち五十三名が参加。改めておかげ桜と根府川の景色の人気を知りました。

残念ながら駅前のおかげ桜は咲き終わり、ソメイヨシノは、これからの状態でしたが、前日に先輩から教えてもらった道端の花草のことを思い出し、少し余裕が持てました。

四班に分かれ出発しました。私がガイドをする頃には傘もいらぬほど、小降りでした。まず根府川駅から元旦に撮った写真を見せると「わあーっ！きれい！」と感嘆の声、談笑しながらリビエラロードといわれる場所へ。イタリアのリビエラの写真と比べてもらおうと「ええっ！似てるうー」と驚きにも似た声。誰も本物のリビエラは見えないようでした。

そして寺山神社、岩泉寺と、緊張感もほぐれ和気あいあいとした雰囲気で、打ち解けて歩を進めることができました。

あとでアンケートを読むと一人参加の方も皆となじめ、楽しく歩けたそうです。クイズを出したりしたことが良かったのかなと思います。先輩方の親切な教えと協力により、無事終わったことに感謝します。

小田原のさくらと町名碑巡り

柏木由美子

四月三日、心地よい暖かさを運ぶ春風がウォーキングにはぴったりの日です。ドキドキしながらお迎えした参加者は二十四名。桜は五分咲きでタイトル「小田原のさくら」鑑賞を外す事なく一安心です。もう一方の「町名碑巡り」は今ままで

気にすることもなく通り過ぎていた石碑一つ一つに関心をもち、歩いてみると改めて各町各小路にも歴史が刻まれていることに心が躍ります。

まずは最初の町名碑、鍋弦小路金篋小路ともに今は想像

し難く、江戸時代の地図、現在の地図を重ねつつご案内し、お客様のうなずく姿に私の気持ちもやっと落ち着きました。

その後も大変興味深く一ヶ所一ヶ所熱心に耳を傾けてくださり、こんなところに石碑がと駆け寄り写真を撮られる方もおり、小田原短大のある天神山からの天守閣方面の桜のある風景は新たな視点と皆さん感動されていました。

その後、人車鉄道の歴史をご案内、そして見応え十分桜のトンネル西海子小路へと。この辺りの北条氏時代からの由緒ある方形の小路が続き、それぞれの由来をご案内しながら進みます。

昼食後気分も一新、後半は「小田原城のさくら」を堪能しながら進み、最後は通常通り事なき裏道を登り切るとそこは城址公園の子供遊園地です。

満開の桜と春休みのたくさんの子供たちの歓声が迎えてくれました。お客様は皆さん熱心で、知識も豊富。企画ガイド初挑戦の私にとっては、大変勉強となり、刺激を受ける体験



頼朝の勸請といわれる
吉田神社にて

今回のコースは、酒匂川沿いのウォーキングを楽しみながら人気の開成あじさいの里をめぐり、最後はアサヒビールで

となりました。あるお客様がおっしゃっていた言葉が印象的でした。「何度参加しても新しい道、新しい事を紹介してくれる。だからまた参加したくなるんですよ」

益々の精進をと気を引き締めつつ、ガイド協会の先輩達の活動に頭が下がる思いです。

酒匂川・あじさいの里開成 からアサヒビール工場見学 松本和子

できたてのビールの試飲も楽しめる内容盛りだくさんのコースです。ガイド協会としては、開成、南足柄まで歩く、初めての企画です。資料が少なく大変な部分もありましたがその分、実行委員のチームワークはバツチリ。協力し合って準備を進め当日を迎えました。

当日の天気は曇り。暑くもなく絶好のウォーキング日和。お客様は、遠方の方々も多く、中には初めて開成に来たという方も。開成駅で受付を済ませ、いざスタート。ガイドするにはちょうどいいアットホームな小人数です。

酒匂川沿いは、川辺を爽やかな風が通り、心地いい。足柄山の隣に富士山がうつすらと見えます。あじさい祭りの会場は三々四分咲きといったところ。田植えの終わった水田にあじさいが映える、まさに田舎の原風景。ガイドもお客様も心癒されるひと時でした。開成町で品種改良されたあじさい「開成ブルー」も見学する事ができ、お客様も喜ばれていました。その後築三百年の古民家瀬

戸屋敷を見学しゴールのアサヒビールに到着する頃には、じんわり汗もにじんできました。歩いた後のできたてのビールは、きつとお客様にも満足していただけたことでしょう。

南足柄は、小さい頃から慣れ親しんだ土地ですが、初めて学んだことも多く、有意義な企画となりました。

難攻不落の総構を歩く 「山側・海側」

石川みどり

今まで「北条は凄い」「難攻不落の小田原城」「秀吉ですら討ち入る事の出来なかつた総構」まるで分かっていないのかのごとくお客様へ「言葉」で伝えていきましたが、積極的に勉強をして、

幾度となく見て歩くと、北条ファミリーの壮大さを、ひしひしと感じるようになりました。小田原城の立地を最大限に活用した独特の構えを築く事により敵の侵入意欲を、どれほど萎えさせた事でしょう。

第一弾は山側五月十九日晴、谷津丘陵の裾野、井細田口、

龍洞院裏へ。戦国時代と現代の地形の違いを頭の中で、想像を膨らませながらの説明、お客様もそれを楽しんでくれました。小田原城が聳え立つ八幡山丘陵を挟む、谷津丘陵と天神山丘陵の山八分目に堀と外側土塁、堀には障子堀を入れる念の入れ方。

第二弾は平地と海側六月十六日晴。平地側の土塁の外側は西側の小田原上水、そして東側の渋取川、それらを広げ泥田にし、敵の侵入を防ぐ。海側は小高い浜堤を利用しその上に浜石を積み、土を盛り固め土塁にしている。砂浜には海に向かい長さ約七十二メートルの柵を約十メートル毎に並べ、見張りをする為の井楼も建てられている。

最後に蓮上院の百メートル土塁と太平洋戦争の爆弾着弾跡、戦国と昭和を一度に見て頂けて、お客様の満足げな顔を見る事ができました。山側、平地、海側と、領民達の生活エリアもろとも囲った総構は、本当に凄い！私達メンバーも完全燃焼の企画でした。

桜の咲く天守で
観覧車に乗りました

第一回 語り手 成川教江



(小田原市立図書館蔵)

小田原に来たのはいつ頃ですか？

昭和三十年の三月です。箱根登山鉄道のバスガイド試験を受けに来ました。本社が小田原駅近くの、今、マンションが立っているところになりました。掘つ立小屋みたいな建物でした。

その時の小田原の印象は？

田舎だなあって(笑)。生まれ育ったのが横須賀だったから。横須賀は、アメリカ人などが多くてハイカラな街だったから。駅そのものは横須賀より大きいけど、まわりの建物などはのどかで田舎っぽい感じでした。外国人がいないのも不思議でした(笑)。

試験のお昼休みにお城の方に歩

いて行ったら、ちょうど桜の季節でお堀端の桜がきれいで。わあ、いい街だなと思いました。その頃は天守はまだ復元されてなくて、観覧車があったのを覚えています。ガイド協会の人は、天守に観覧車はなかったっていうけど、資料にも残ってるし、わたしは見た記憶があります。

見事試験に受かり小田原に住むようになったんですね。

駅のそば「氏政氏照の墓」の近くに寮があったのですけど、まわりの木立が鬱蒼として寂しいところでした。ウチに帰りたいって帰りたくって、ふとんを担いで逃げ出し横須賀から通勤しました。配属は宮ノ下でした。貸切バスと定期バス(路線バス)がありました

すが、定期バスも湯本以降はガイドをするんです。

当時のデートコースは？

ありません(笑)。当時は喫茶店もほとんどないです。食べ物屋だつて駅前の「寿庵」で蕎麦を食べるくらいでした。

街の中もあまり歩かなかつたです。小田原の駅の近くは、道がまっすぐじゃないでしょ。用を頼まれて行ったのはいいけど、なかなか帰ってこれなくて、迷子になったこともあります。

その後、恋愛結婚をしたのですね。

二十一才の時です。主人は箱根登山バスの運転手です。社内恋愛ということになります。バスガイドはその時にやめました。結婚して、子供を授かって、その頃、荻窪の社員寮に住みました。当時は小田原駅の自由通路がないから、荻窪から総構えの久野口に入って大稻荷さんの裏を通って駅の表側に出ました。その頃は総構えなんて整備されてないから、史跡だなんて意識しませんでしたよ。

毎日、お弁当を作って届けまし

た。主人の運転する定期バスの小田原駅到着時間に合わせ、待って渡すんです。「成川さんのお弁当」って社内で有名でした。十分くらいの待機時間中に子供をバスの中に入れて遊ばせたりもしました。

今のドン・キホーテのところが「福屋」という旅館で、その隣が「福の湯」という銭湯でした。そこがきれいだつたので毎日そこに入りに行きました。今のダイヤ街あたりも買い物ゾーンで「魚国」で魚を買ったりもしましたね。

富水に土地を買って社宅生活から抜け出しました。当時の富水はまわりが田圃ばかり、本当に田舎でしたが、今じゃ立派な住宅街。先見の明があつたかなと思つています。

今の小田原に思うことは？

以前はお城を中心にできた街でした。今は広がって様々。散らばっている観光資産をうまく使つてほしいと思います。八幡山にも八戸の「根城」みたいに北条時代の遺構が復元されれば面白いですね。

(文責：編集部)

象も歩いた石畳

岡田秀昭

江戸時代までに象は七回来日している。初めて来たのは一四〇八年で、東南アジアから若狭国に上陸、四代將軍足利義持に献上された。それから五回目に来日したのが今回取り上げる象で、徳川吉宗の希望により来日した。

ベトナム生まれのアジア象で、中国の商人が吉宗に献上したものだ。享保十三年（一七二八）六月七日、長崎の港にオスマス二頭の小象が到着した。二頭にしたのは繁殖を考えてのことと思われる。

長崎では、將軍献上の象として、総動員体制で江戸への旅の準備に取り掛かった。達者な馬使いが選ばれ、ベトナム人の象使いから指導を受けた。象稽古係、飼料調達係など、一行は十四名となった。象に海路ではな

く、わざわざ陸路を歩かせたのは、幕府の威光を示すという吉宗の政策もあっただろう。

しかし、メスの象は上陸後に病死してしまった。残るオスマ象が、翌十四年三月に長崎を出発、約二ヶ月をかけて江戸へ向かった。この象の体長は、記録によってもまちまちであるが、背丈五尺七寸（約一七〇cm）ほどであったといわれている。

江戸に向かう途中、京に立ち寄った。中御門天皇が、象を見たいと言いついたからだ。しかし、官位がないと御所には入れない。そこで苦肉の策として、象に「従四位広南白象」の称号をおくり、四月二十八日に謁見が許された。

この時代の街道は、各所に難所といわれる山越えや渡渉などがあり、けっして象の通行に適しているとはいえない。特に東海道最大の難所といわれた箱根山越えは、最も困難であった。小象とはいえ、東海道の狭く滑りやすい石畳の道を歩かせるのはさぞかし大変だったろう。

箱根宿では象を迎えるため

に野犬狩りを行い、新規の象小屋を建て、また象の好物である竹や餌なし饅頭、九年母（蜜柑の一種）などを揃え、さらに付き添いの者たちのために、酒（象も酒が好きだという説もあった）や、小田原から取り寄せた海産物を用意して一行の到着を待っていた。

五月十五日頃、象は箱根宿に到着した。ところが、象の様子はどうもおかしい。長旅の疲れに加え、箱根西坂のきつい上りが追い討ちをかけ、体力は限界を超えてしまったようだ。

小田原、宮城野などから、象の好物を次々取り寄せ、体力の回復を図ろうとしたが、象は動かない。そこで箱根権現や駒形権現で祈祷し、元箱根の福寿院（箱根権現の僧坊、現在はな



い）で護摩を焚いてもらうなど、神仏総動員で象の平癒を願った。そのかいあってか、十九日には体力が回復し、箱根宿を発つことができた。

その後、小田原・平塚・保土ヶ谷・神奈川・川崎で泊まった。馬入川（相模川）や六郷川（多摩川）などの大河は、船橋にしてその上に小屋を建て、渡ったと伝わっている。

象は、五月二十五日、江戸の浜御殿（現・浜離宮）の新築なつた象小屋に到着した。二十七日、江戸城内大広間の車寄せで、象と対面した將軍吉宗は、興味津々にこの珍獣を観察したという。

その後、象は十三年間浜御殿で飼われていたが、寛保六年（一七四一）、中野村（現・東京中野駅周辺）の農民に払い下げられ、翌年その数奇な生涯をまっとうした。

（参考文献）

和田実「享保十四年、象、江戸へゆく」

石坂昌三「長崎から江戸へ象の話」大和田公一「象の箱根越え」

	日時・集合場所	参加費	コース
小田原宿観光回遊バスで巡るらくらく小田原再発見ツアー	9月28日(土) 9:30~14:00頃 小田原駅集合	2500円	小田原城・一夜城・文学館・漁港などを巡る。 A・Bコースあり
国府津～箱根へ小田原馬車電気鉄道の軌跡完全踏破2日間 No.1コース	10月19日(土) 9:00~13:00頃 国府津駅集合	700円	国府津駅～親木橋～松涛園～連歌橋～山王松原～電鉄本社前停車場
国府津～箱根へ小田原馬車電気鉄道の軌跡完全踏破2日間 No.2コース	10月26日(土) 9:00~13:00頃 小田原駅集合	700円	幸町～箱根口～風祭～地球博物館～前田橋～落合橋～箱根湯本停車場跡
国府津の文化遺産巡り	11月10日(日) 9:00~14:30頃 国府津駅集合	1000円	真楽寺～蓮台寺～宝金剛寺～慶喜公別荘跡～田島横穴墓～国府津駅
古地図を片手に 戦国時代の遺構を歩く	11月30日(土) 9:30~12:30頃 小田原駅集合	700円	八幡曲輪～三味線曲輪～毒榎平～大堀切西堀～御鐘ノ台～東曲輪

◆参加申し込みは実施日の45日前です。内容が一部変更されることがあります。

六月以降の退会者
栗原 美紀さん
ありがとうございます

ございました。



リレーエッセー わたしの城旅⑤

現存最古の「丸岡城」

飯田宗男

古の天守か？といわれる丸岡城へ。
父の白寿祝のため家族で福井県武生の我が実家に帰り、芦原温泉へ出かけてお祝いをした。翌日雨のため予定していた東尋坊遊覧をやめて、柴田勝家の養子・勝豊が建て現存最

古の天守か？といわれる丸岡城へ。
家族旅行ではいつも父の悲哀を感じる。城好きの私は、古色蒼然とした野面積の石垣や、真壁造、漆も塗っていない素板の下見板張など、飾り気のない素朴な造作を感慨深く味わっていたいが、家族は全く興味を示さない。「この城は天正四年頃に建てられ、この濠は五角形をしていて…」との私の熱っぽい説明にも、振り向きもせずさっさと天守閣内へと急ぐ。中の急な階段で「えー、スカートでなくて良かった」と大声。格子窓や破風部屋など見所はすつ飛ばしてどんどん上の階へ。私はゆっくりその後を登る。
やがて家族から「石瓦は重くないの？」「この穴(狭間)じゃ敵を狙えないじゃん…」「昭和の地震で倒壊したのに何故現存(天守)になるの？」とようやく会話になり、帰りがけに「こじんまりしているけど、古風でいい城ね」との声が聞かれて何故かホっとした。帰路途中で「越前そば」を口にしたら全員落ち着いたようで、「城より蕎麦」だったかも。

編集後記

強烈な暑さだった夏も終わりにかけています。皆様の今年の夏はどんな夏だったでしょうか？新しい企画の連載も始まりました。ご感想お知らせください。(T)

編集委員

磯崎知可子(委員長)

戸田博史 中村哲夫

宮澤周子 上田信一